

編集室から

今月号の発行直前に、熊本県で大きな地震が発生しました。被災された方々に、衷心よりお見舞い申し上げます。

能登半島地震の被災者の一人として、現地の惨状を見るに耐えません。真冬は、着込めば凌げましたが、酷暑の中の停電で、エアコンが使えないとなると、熱中症・睡眠不足などに加え、食料の痛みも早いものと思われ、感染症などとともに、より一層、心身に負担が蓄積するのではないかと、案じられます。

熊本のお仲間、知人とは幸いにも連絡が取れ、無事を確認させていただいたのが、なによりでした。ただ、お亡くなりになられた方々と、そのご関係の方々のご心痛は如何ばかりか…。

今回、動いた活断層に未だ割れ残りがあるそうで、そちらの方も心配です。能登半島でも2007年にM6.9の地震があれ、その後2023年にも奥能登でM5.4の地震が起きていました。

熊本でも、前回地震で自宅を復興されたにもかかわらず、今回また被災された方もいらっしゃるのではないかとすると、やるせない想いでいっぱいです。

今月の表紙写真は、金沢の大学生によって前年同月に地元で開かれたランタンフェスティバルの様子です。元来、中国で魔除け・邪気払いと、健康や幸いを願うものだったそうです。専門家から予想されている割れ残りによる断層活動が、大きなものとなりませんように。そして、一日も早い被災地のインフラ復旧と、生活復興がなされますように。

なお、今月号の執筆陣各位の原稿は、いずれも震災前に入稿されたものですので、文中では触れられておりませんことに、ご理解を頂ければ幸いです。（は）



このニュースは、地域計画に携わる若手の技術者の参考となることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2026/08

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2026/08

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

葉 月



薬師の里（石川県七尾市）

にて
by hama

**復興するぞ！
熊本・能登！**

寄稿『日本の医療はどうなる？』

サンポート高松クリニック 井垣 俊郎

今回は、医療費負担の問題について述べました。これからの日本は医療費が増え続け、人口は減り続け、経済の爆発的な回復も期待薄です。医療費負担に関する先行きは、暗いと思えます。そして、そうした経済的負担の問題よりも実はもっと深刻なことは、自分が高齢者になり体が弱った時に、どのような介護が受けられるのかという問題です。介護施設における虐待行為の報道をよく目にされるようになったのではないのでしょうか。もちろん今は、ごく一部の不心得な人間の悲しい行為です。殆どの介護職員は、懸命に低賃金で重労働に耐えておられます。しかし悪い予感ですが、そうした介護現場のモラル低下につながる下地は社会全体に広がり続けているように感じます。

◎

では、どうすれば良いのか。日本社会が抱える医療や介護の問題は、とても一個人でどうにか出来そうにありません。しかし、一人の人間として我が身を守る為なら、出来る手立てがあります。それは、自分自身の健康を保ち続けることです。「健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間」これを健康寿命と言います(図)。この健康寿命を如何にして伸ばすか。大学卒業以来ずっと生活習慣病に関わってきた、私の思うところをこれから何回かに分けてお伝

え出来ればと思います。

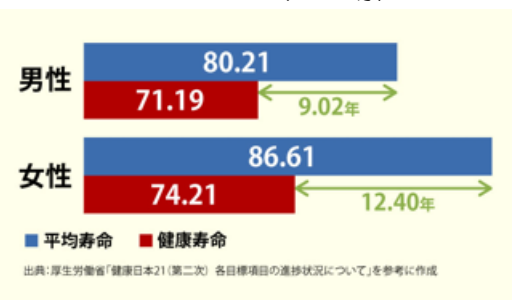
◎

健康寿命を伸ばすための生活習慣として、以下の8つのことが最低限で必要だと思っています。人によって重要度は変わってきますので、あえて順番はつけないようにします。

- ・体重を毎朝測り自分の決めた上限を守る
- ・運動をする、なるべく歩く
- ・加熱した野菜は多いほどよい
- ・脂と塩は少ないほどよい
- ・間食をしない、口に入れて甘い飲料は飲まない
- ・禁煙する、飲酒も少ないほどよい
- ・生きがいや楽しみを持つ
- ・感染症から身を守る

◎

次回から、各々について解説をしていきます。様々なストレスに晒され続ける世の中になりました。利用出来るものは上手に生かしながら、「これなら出来そう」と思っているだけの内容にしていきたいです。



【プロフィール】

(いがき としお) 金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又クヌクしています。

濱の起業塾 八十八『地域経営の視点⑪』

国会で副首都の実現化に向けた法案が成立した。二〇三〇年代に南海トラフによる巨大災害が、東京から宮崎県沖にわたる広大な太平洋側地域で予想されている中、ようやくというより、やや遅きに失しつつも辛うじて間に合うかも知れないというタイミングかと思う。

現在のように、国家の重要な機能が、東京に一局集中し、それに連動して人口も過度に集中している状態で、巨大災害が発生したら、どうなるか。陽を見るよりも明らかだろう。

コンピュータ・システムの世界では、集中と分散については、長く議論され、実証されてきた。集中は全体的に効率を最大化できる。分散は、逆に非効率ではあるが、被災・負荷リスクも分散でき、システムに拠っては大型マシンに劣らない協調演算も実現しうる。現在ではスーパーコンピュータなど、高性能マシンへの集中と、インターネットによる超分散との役割分担が定着している。

『

同じように、国家や地域を考えると、一局集中がいかにリスクを内包しているかが、理解されよう。自然災害に限らず、□・ウ戦争を見ても集中設備が狙われると国家的な損害が大きく、防衛面でも集中リスクは検討される必要があるはずだ。

地域ではどうか。平成の合併で、周囲の町村を抱え込むことになり、広域合併となった市では、特に集中と分散について、十分な検討がなされないと、中心部への集中と、周辺部の過疎・消滅が連動し、地域経営が一層非効率と化していく。人口減少時代にあって、この歪な傾向は、周辺部の地域崩壊を加速するため、早急に是正される必要がある。

これまでは、「選択と集中」が是であったが、これらは既に一世代前の概念であり、「分散と集中のバランス」こそが、新しい概念と言えるかも知れない。

その際、保守派から分散の非効率が責められるはずだが、これこそ新しい技術・Dxや、ロボット(自動運転自動車もこの範疇に入る)技術の活用で乗り切ることで、求められているのではないか。

きただより114 弘前大学 地域社会研究会 上村 康之
『「飛鳥・藤原の宮都」世界文化遺産登録とその持続』

奈良県の明日香村、橿原市、桜井市の宮殿や寺院の跡、墳墓など19遺跡からなる「飛鳥・藤原の宮都」としてこの7月26日に世界文化遺産に登録された。これで日本の世界遺産は文化遺産が22件、自然遺産が5件である。

1972年、高松塚古墳の発見と「飛鳥美人の壁画」、翌年には「高松塚古墳の保存のための寄付金付き特殊切手」の発行などの記憶が残っており、いつか見てみたいと思っていたが、当時小学生の筆者には飛鳥地方（明日香村など）は、あまりにも遠いし実現不可能と思っていた。高校の修学旅行で奈良に1日だけ行き、薬師寺、法隆寺、東大寺、春日大社、奈良公園をバスで回ったがそれぞれ数十分見た程度であった。

2022年5月下旬に念願の飛鳥地方に旅行することができ、近鉄・飛鳥駅から自動レンタサイクルに乗り、キトラ古墳、高松塚古墳、石舞台古墳、飛鳥宮跡、奈良県立万葉文化館などを巡り近鉄・橿原神宮駅までの行程であった。僅か6時間ではあったが、明日香村内の古墳群、集落、田園、山河など景観も美しく、これが古都保存法の特例法として制定した「明日香法」（1980年、公布・施行）で守られている村が実感できた。最初は明日香村内をブーンと音を出し自動レンタサイクルで？と思ったが、移動距離や高低差の連続を考えると車を使わずに一人で回るのはこれがベストであったろう。

青森市での「地方シンクタンク」時代、1992年に白神山地が世界自然遺産に登録され、筆者の事務所でも白神山地の持続可能に向けた研究や提言書をまとめた。その後、青森県では三内丸山遺跡をベースに世界文化遺産登録を目指し、様々な紆余曲折があったが、2021年「北海道・北東北の縄文遺跡群」として世界文化遺産登録された（北海道6、青森8、岩手1、秋田2の17の遺跡）

観光客数の増減が登録の効果ではないが数字として把握できる指標なのでその数をみると、白神山地は減少傾向にあり、縄文遺跡群は三内丸山遺跡だけが突出して伸びているという。

よそ者の戯言ではあるが、飛鳥地方は「飛鳥・藤原の宮都」の世界遺産登録で観光客が急増することが予想されるが、一時のブームで地域の良さが失われるのではなく美しい村が持続していくことを願いたい。

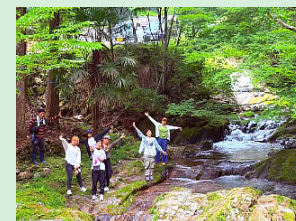
『過疎集落が取り組む地域再生への道 17』
（一社）しろにし 理事 白川 晶也

“移住”や“関係人口”をキーワードに、全国各地で繰り広げられ税金が投入される、移住補助金やイベントの数々。果たして「100万円くれるからこの自治体に引っ越そう」なんて考える人がどれだけいるのでしょうか。そのまちに人を引き寄せる魅力があれば、あと一押しとしての効果はあるでしょうが…。そんな思いから、（一社）しろにしでは「地域維持レスキュー®」として、いまそこに暮らしている方の定住支援を目的に、関係人口創出策を組み合わせています。そのメインコンテンツである「ぶどう山椒収穫レスキュー」は今年4年目を迎え、これまでに最多の100名を超える方が援農ボランティアにお越しくださっています。この取り組みが少しずつ広がりはじめたようで、今年はリピーターさんや女性のソロ参加が目立ちます。

では、酷暑のなかの収穫作業にも関わらず、なぜ多くの方が清水地域に足を運んでくれるのでしょうか。発祥の地であるぶどう山椒の魅力に惹かれるケースが多いのはもちろんですが、それだけではないだろうと思っています。農業系の財団法人である大和屋との連携、ふるさと開発公社が運営するしみず温泉への誘導のほか、受入農家さんをはじめ一緒に収穫作業を手伝っている地元のみなさんと過ごす時間が大切なんだと感じています。そして手前味噌ながら、その一助となっている（一社）しろにしの存在が大きいと思います。地域と地域外の人や企業、大学、行政の架け橋となる動きはもちろん、地域内の人や集落、事業者の拠り所となりつつあること。国の省庁で言われている「農村RMO」「地域の人事部」などの動きに当てはまるものかもしれません。

しかし、清水地域のように高齢化が進む過疎地域では、このような横連携だけではうまく進まないとも感じています。人間の身体って、異物が入ってくると吐き出そうとします。組織も地域もそれと同じ。自分の考えと異なる世代や人が入ってくると、排除しようとする気持ちが芽生えてもおかしくはありません。地域の世代間を繋ぐ縦連携。緩衝材となる、そんな“中間支援”的な動きも必要です。

地域の魅力って、人や景観、歴史、産物など、自分たちが気づいていないだけで、実は既にそこにあるものばかりです。しかし、あきらめたり、他者依存・他者批判したりして沈んでしまっている。みかんジュースもそうです。放っておくと、果肉や旨味が底に沈殿して美味しそうに見えない。でも、ピンを振ってあげると全体がみかん色になり、つい飲みたくなる。そんな“かき混ぜ役”、中間支援組織の必要性が日に日に増しています。



（写真：和歌山大学観光学部LPP）

8日目は、今回の旅で唯一の海外である釜山（韓国）に寄港。手配したガイドの車で、旧市街地ではなく、最近の開発が目覚ましいウォーターフロントへと足を延ばした。

まずは海雲台（ヘウンデ）ビーチの東端にそびえ立つ、韓国で2番目に高い超高層ビル「海雲台エルシティ（LCT）ランドマークタワー」に向かった。展望台「BUSAN X the SKY」（100階・地上384m）へは、高速エレベーターに乗ってわずか56秒で到着する。床がガラス張りになっている場所があり、思わず足がすくんでしまった。アミューズメント性は他にも見られる。

エルシティのすぐ足元からスタートする「海雲台ブルーラインパーク」では、廃線になった線路を利用し、海岸線に沿ってカラフルな小型モノレール「スカイカプセル」の軌道が延びている。乗車を待つ人々で長蛇の列ができていた。軌道の眼下に長く続く遊歩道（ウッドデッキ）の途中には、海上にダイナミックに張り出した白いスタイリッシュな展望プロムナード（スカイウォーク）が現れる。これを見ると、最近、宿泊税で年間7億円を稼ぎ出す熱海にも導入できないだろうかと思いが膨らむ。これに地方創生交付金を加えれば、相当な規模の事業ができそうだ。

次に観たのは松島（ソンド）エリアの「海上空中」を活用した観光開発だ。「松島エアクルーズ」と称し、海の上をまたぐように巨大なロープウェイが渡されており、ゴンドラからは釜山の海と街並みを一望できる。なんと、このゴンドラの床もガラス張りだった。

釜山の海岸沿い開発の最大の強みは、「地形（海・山・崖）を恐れない大胆なスケール感」と「古いインフラ（廃線など）を最先端の観光資源へ変貌させる企画力」にある。100階建てのビルから見下ろす超高層都市の姿、海の上を歩き、海の上を飛び（ロープウェイ）ような体験型インフラ、そして市民や観光客が優雅に歩けるウッドデッキの整備。釜山が港湾物流都市から、世界的な「海洋レジャー・観光先進都市」へと見事に脱皮している姿がそこにはあった。

釜山の次、9日目は松山に降り立ち、まっすぐに萬翠荘（ばんすいそう）に向かった。大正11年（1922年）に、旧松山藩主の子孫である久松伯爵の別邸として建てられたフランス風の洋館で、現在の価格に換算すると坪700万円程をかけたという豪奢な建築だ。

この下には「坂の上の雲ミュージアム」がある。建物は三角形の平面構成で、設計者の安藤忠雄は、緩やかなスロープによって「坂」を登る行為そのものを空間化している。ここを単なる「展示箱」ではなく、「人々が立ち止まり、思索にふけるための場所」として設計したのだという。建物全体が、坂の上の雲を目指した明治の若者たちの志を映し出す「装置」となっている。前回来た時にはなかった図書室が増築されており、「思索にふけるための場所」の完成形がそこにはあった。

10日目は終日クルーズ。松山からは太平洋に出て清水港に向かう。

11日目、9時に清水へ上陸。静岡県民であった自分が、船でこの地にやってくるというのは新鮮な感覚だ。港から静岡鉄道に乗り、県立美術館前駅で降りた。

この美術館の建設に際しては、県に入庁し配属された都市住宅部営繕課の2年目の時に、主幹の下で設計監理の仕事に携わった思い出深き場所である。駅からなだらかに登っていくと、彫刻プロムナードが我々を迎えてくれる。当時の植栽はすっかり大きくなり、最初に現れるJ.ロザティの「アークⅡ」をライトアップするための照明を隠す意図で植えたキャラボクは、いまや巨大化して彫刻よりも目立つ存在になってしまっていた。プロムナードの植栽を含めたメンテナンスに、あまり手が入っていないのが見て取れた。公共の公園の植栽に手が入っていないことはよくあることだが、小生が関わった小山町の穂豊門公園や金時公園は違う。「集落支援員制度」による国の補助金を巧みに使い、日々手入れが行き届いているため、常に美しい状態を保っている。もちろん、我が家の庭もね。こちらは自分の手によるけど。

